



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	鮭鱒流網漁期に於ける北海道東部沖合のプランクトン分布に就て
Author(s)	田村, 正; 藤井, 武治
Citation	北海道大學水産學部研究彙報, 3(SPECIAL), 56-64
Issue Date	1953-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22779
Type	departmental bulletin paper
File Information	3(SPECIAL)_P56-64.pdf



鮭鱒流網漁期に於ける北海道東部沖合の プランクトン分布に就て

田 村 正
藤 井 武 治

1. 緒 言

北海道東岸沖合には毎年 5~7 月の候に亘り鮭鱒の流網漁業が盛となるが、その地域は日高沖合から北方の花咲沖合の間で、操業され、漁期も南部に早く北に遅れる傾向がある。

鮭鱒類は寒流系の魚であるからその洄游は比較的狭い適温範囲を移動することは勿論であるが又一方此の季節の鮭鱒類は索餌洄游中の魚群であるから、餌料プランクトンの種類や分布とも密接な関係があるべきは當然である。

晩春から初夏にかけての北海道東海岸の鮭鱒流網漁業は重要な漁業の一つであるが、従来此の方面の漁場の海洋學的の調査は比較的等閑視されてきた感がある。北海道大學水産學部練習船おしよる丸並に北星丸は此の海區で昭和 24 年度から流網漁業を実施することゝなつた。おしよる丸は此の漁業で海洋調査並にプランクトン調査を実施することゝなり、一方に於ては流網漁業も実施する計画をたてられた。おしよる丸前船長櫻庭誠三教授は著者の一人田村にプランクトンの調査に協力を求められた。海況並にプランクトンの分布状況と鮭鱒漁業試験が同時に並行的に實施されれば、漁況と海況との関係は更に明確となるので、本調査が數年間連續的に實施されるに於ては、必ずや本漁業の基礎的資料となり貢献するところも尠くないものと信ずる次第である。本調査をなすに當り種々御便宜を與えられた、おしよる丸前船長櫻庭誠三氏並に採集に當り御協力下さつた本校の小藤、五十嵐、小林、西山の各教官に感謝の意を表するものである。

2. 採 集

プランクトンは海洋觀測を實施した地點で垂直採集をし、深度は 10 米から表層までと、25 米から表層まで及び 50 米から表層まで曳上げた材料である。採集に使用したネットは 1950 年 6 月の採集では節絹 X X 16 號の徑 30 cm、長 100 cm のもので他は普通の定量採集網である。

採集地點は 1949 年は第 1~3 圖に 1950 年分は第 4~5 圖に示した。

第 1 表 北海道東南海區のプランクトンの採集 (1949 年)

地 點	月	日	水 温			透 明 度 (米)	プランクトン沈澱量(cc.)	
			0 m	25 m	50 m		10~0 m	50~0 m
1	V、	25	9.2	5.50	7.52	9.0	—	3.0
2	"	"	9.2	8.90	7.23	10.0	—	13.2
3	"	"	10.5	9.18	6.83	8.0	1.0	2.0
4	"	"	9.5	8.44	6.50	8.0	0.6	2.0
5	"	"	9.9	7.25	7.03	11.0	0.6	8.0
6	"	"	10.0	5.02	4.02	10.0	1.0	6.0
7	"	26	8.9	7.78	6.02	9.0	—	1.0
8	"	"	9.5	7.77	6.40	11.0	—	0.5

9	V,	26	10.5	10.09	9.40	6.0	—	2.0
10	"	"	10.3	8.68	9.54	8.0	—	5.0
I	"	29	12.6	6.07	4.15	7.0	0.8	1.5
II	"	"	11.0	7.37	5.22	—	—	4.0
III	"	"	10.3	7.05	—	—	0.6	6.0
11	VI,	2	11.0	8.97	7.26	6	6.0	—
12	"	"	9.9	6.49	2.90	12	2.5	—
13	"	"	7.8	3.45	2.58	11	1.8	—
14	"	"	9.8	5.95	2.30	13	—	—
15	"	"	11.4	—	—	13	21.0	—
16	"	"	10.9	9.89	2.81	11	22.0	—
17	"	"	10.8	10.10	3.37	10	4.0	—
18	"	3	11.4	4.33	2.62	12.0	—	7.0
19	VI,	10	9.2	8.21	7.46	10.0	2.0	—
20	"	"	9.0	8.37	3.21	11.0	3.0	—
21	"	"	7.2	2.86	2.11	9.0	2.2	—
22	"	"	9.4	2.58	2.61	4.0	1.5	—
23	"	"	8.1	10.43	10.70	9.0	1.0	—
24	"	"	8.1	4.58	2.56	9.0	0.5	—
25	"	13	10.2	5.28	4.66	9.0	20.0	—
26	VI,	28	9.6	5.82	3.45	6.0	2.0	—
27	"	"	10.7	5.59	2.51	—	1.3	—
28	"	"	11.8	11.75	2.84	—	1.6	—
29	VI,	29	14.9	15.41	9.63	—	3.6	—
30	"	"	10.8	7.15	2.55	14.0	1.5	—
31	"	"	10.1	3.12	3.26	—	1.2	—
32	"	"	11.3	7.60	3.52	12.0	0.6	—
33	"	"	11.9	7.56	3.10	13.0	0.3	—

第2表 日高沖プランクトン分布(量)(1950年)

St.	月	日	時 間	水 温			透 明 度	Vol. of pl (cc)	主要プランクトン群
				0 m	25 m	50 m			
1	V,	4	13.30	7.0	5.73	5.69	11.5	1.2	<i>Diatom, Calanus</i>
2	"	"	16.30	7.4	6.00	5.84	12.0	1.5	<i>Diatom</i>
3	"	"	—	9.3	7.93	7.14	12.7	1.7	"
6	V,	10	21.10	9.05	8.53	8.42	—	3.5	"
7	"	"	18.05	4.93	4.22	1.32	5.0	15.2	<i>Diatom only</i>
8	"	"	14.20	5.02	0.24	0.43	8.5	5.0	<i>Diatom, Calanus</i>
9	"	"	—	4.14	2.20	0.90	7.0	3.5	<i>Diatom</i>
10	"	"	8.30	4.32	5.18	5.60	—	3.6	<i>Diatom, Calanus</i>
11	"	"	5.20	6.20	6.03	4.62	—	3.6	"
12	"	"	2.35	5.61	1.04	1.69	—	1.8	<i>Calanus, Diatom</i>
13	"	9	23.15	6.05	6.69	5.54	—	2.0	<i>Diatom, Calanus</i>
14	"	"	21.30	7.46	7.01	6.36	—	1.5	<i>Diatom, Calanus</i>

15	"	18.50	6.65	3.10	6.57	9.4	1.6	<i>Diatom, Calanus</i>
16	"	16.00	6.67	5.21	1.78	8.1	1.8	<i>Diatom</i>
17	"	13.20	7.01	2.67	1.74	8.1	2.5	<i>Diatom, Calanus</i>

第3表 噴火灣内のプランクトン分布量 (1950)

St.	月	日	時 間	水 温			透 明 度	プランクトン 沈 澱 量(cc.)	主要プランクトン群
				0 m	25m	50m			
18	V	11	12.50	8.27	2.49	2.33	4.5	1.6	<i>Diatom</i>
19	"	"	—	7.72	2.76	2.24	5.0	0.4	"
20	"	"	11.40	7.32	3.26	2.11	5.3	2.0	"
21	"	"	9.35	6.19	2.99	1.65	8.5	0.6	"
22	"	"	7.30	7.35	3.10	2.69	10.0	0.4	<i>Calanus</i>
23	"	12	6.00	7.17	5.70	2.89	13.5	—	—
24	"	"	4.45	6.26	3.81	2.87	—	1.3	<i>Diatom, Calanus</i>
25	"	"	3.05	7.47	4.73	3.48	—	1.0	<i>Diatom</i>
26	"	"	2.00	7.97	5.20	3.63	—	1.4	"
27	"	"	8.45	8.09	2.82	2.54	—	0.4	"
28	"	"	—	6.47	5.65	—	6.5	—	—
29	"	11	18.20	—	3.96	2.68	12.5	0.6	<i>Diatom</i>
30	"	"	—	7.87	3.55	2.33	11.0	1.0	<i>Diatom, Calanus</i>
31	"	"	16.50	7.37	5.73	2.34	13.0	1.2	<i>Diatom</i>
32	"	"	—	8.76	3.55	2.34	10.5	1.1	"
33	"	"	19.10	7.91	4.07	1.99	11.0	1.6	"
34	"	"	—	7.87	6.19	2.46	—	1.6	"
35	"	"	"	9.62	3.95	2.49	—	0.7	"

第4表 釧路沖プランクトン分布 (1950年)

St.	月日時間	水 温 °C			透明度	25m ~ 0 m		50m ~ 0 m	
		0 m	25m	50m		プランクトン 沈澱量(cc.)	主 要 プランクトン	プランクトン 量(cc.)	主要プランクトン
1	VI 7 12.15	13.59	12.75	10.75	11.0	2.0	<i>Doliolum</i>	55.0	<i>Doliolum, Cope.</i>
2	" 14.25	8.11	6.29	3.26	7.5	16.0	<i>Cal. Pterop.</i>	25.0	<i>Sagitta.</i>
3	" 15.45	7.29	3.10	2.23	11.0	15.5	<i>Cal. Aglan.</i>	22.0	<i>Aglantha. Cal.</i>
4	" 23.50	5.65	4.02	2.72	—	8.0	<i>Diat. Aglan.</i>	18.0	<i>Sag.</i>
5	" 8 1.40	7.18	4.91	1.96	—	6.0	<i>Diat. Sagit.</i>	13.0	<i>Diatom, Calanus</i>
6	" 4.35	7.20	3.75	1.79	—	8.0	<i>Cal. Diat.</i>	14.0	" "
7	" 7.20	7.59	4.20	1.35	—	14.0	<i>Diatom</i>	19.0	<i>Calanus</i>
8	" 10.25	7.55	3.48	1.21	5.0	3.0	"	4.0	<i>Cal. Euphausia</i>
9	" 13.05	9.95	4.25	4.19	10.5	4.0	<i>Cal. Diat.</i>	20.0	<i>Diatoms. Sagitta.</i>
9'	" 17.15	8.40	5.53	—	9.5	10.0	<i>Diatom</i>	14.0	<i>Euphausia, Sagit.</i>
10	" 10.00	8.10	6.42	2.79	—	12.0	<i>Copepoda</i>	16.0	<i>Euphausia, Cope.</i>
11	" 23.15	8.40	6.44	2.18	—	12.0	<i>Cop. Aglan.</i>	15.0	<i>Cop. Aglantha</i>
12	" 9 2.15	7.00	—	5.33	—	2.2	<i>Cal. Aglan.</i>	3.5	<i>Cop. Sagitta</i>
13	" 3.45	6.50	3.00	1.83	—	2.0	<i>Diat. Cal.</i>	13.0	<i>Diatom. Calanus</i>
14	" 6.15	5.30	3.18	2.27	5.0	7.8	<i>Diat. Cal.</i>	15.4	<i>Calanus, Sagitta</i>
									<i>Diatom, Calanus</i>

3. 結 果

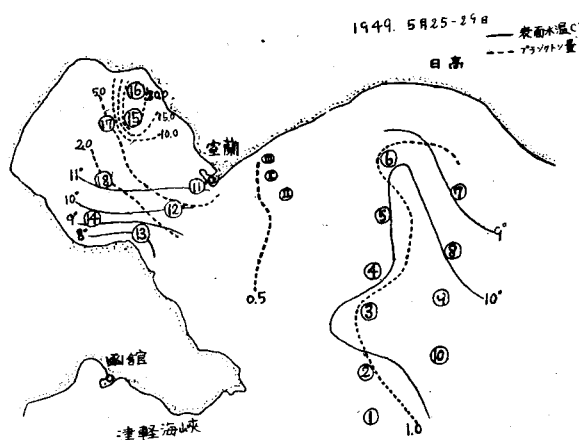
A. 量的分布：プランクトン採集時に於ける水温透明度並にプランクトン沈澱量は第4表に示した。

(1) 1949年6月の噴火灣

6月2及び3兩日の10米から表面までのプランクトン採集量を圖示すれば第1圖の様になる。即ちSt.15,16(伊達沖)はプランクトン量極めて多く、21.0~22.0ccに達して居り、大体に於て灣の北東部に濃密な發生を見、南西部に少なかつた。

(2) 1949年5月下旬の日高沖

第 1 圖



5月25日乃至29日の間に日高沿岸沖合の採集に於ては、噴火灣内に比べてプランクトン量は極めて少く1.0~0.6ccで、分布は大体均等であつた(第1圖参照)。

(3) 1949年6月釧路並に襟裳岬沖

6月10日乃至29日の間に海洋観測が實施されたが、その際10米層から曳上げたネット中の沈澱量の量的分布を示せば第2圖及び第3圖の様である。即ち釧路沖合のSt.29に *Diatom* を主群とする濃密な區域があり、これより北西(沿岸)方向に薄くなるが、釧路沿岸では再び濃厚な分布を

示した。

(4) 1950年5月の噴火灣

5月4日から5月12日の間に噴火灣並に日高沖合にかけての海洋調査に際し採集したプランクトン沈澱量を示せば第4圖の通りである。即ち襟裳岬沖合のSt.7にプランクトンの濃厚(15.2cc)な發生があり西方に向つて減少して居る。又室蘭沖から登別の沖合にプランクトン量の少い(0.4~0.6cc)海區があり、噴火灣内も比較的僅少で0.4~1.6ccの程度であつた。

(5) 1950年6月釧路沖海區。

6月7日から9日に亘る釧路沖合の調査では、プランクトン分布は第5圖の様になり、襟裳岬沖合St.16を中心として濃密な區域が帶狀に東に延びて居り、これを間にして兩側にプランクトンは減少するが、釧路の沿岸部では *Diatom* が多く發出し、St.13では最少量の2.0ccが見られた。

B. 各海區に於けるプランクトンの出現狀態

(1) 1949年6月の噴火灣のプランクトン並に海況

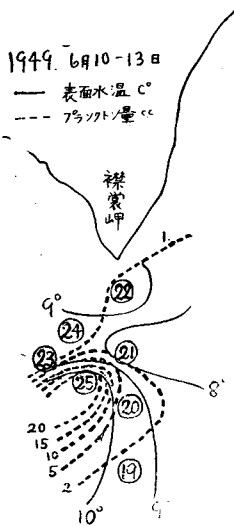
灣内でSt.11から18までの間に7地點でプランクトンを採集し、これが結果は第5表に示した。今期の噴火灣では大體植物性プランクトンの主なもの10種、動物性プランクトン12種の計22種であつた。植物性プランクトン中 *Chaetoceros* 属のものが最も優勢で *Ch. contortum*, *Ch. decipiens*, *Ch. Lohrenzianum*, *Ch. radicans*, *Ch. spp.* があり、この外稀に *Corethron criophilum*, *Rhizosolenia*

*alata*が見られた。斯様な出現状態は同期の日高沖海區及び釧路沖海區と著しい相違であつた。灣内では珪藻類の春期増殖の末期と認められ、動物性プランクトン相は極めて貧弱であつた。

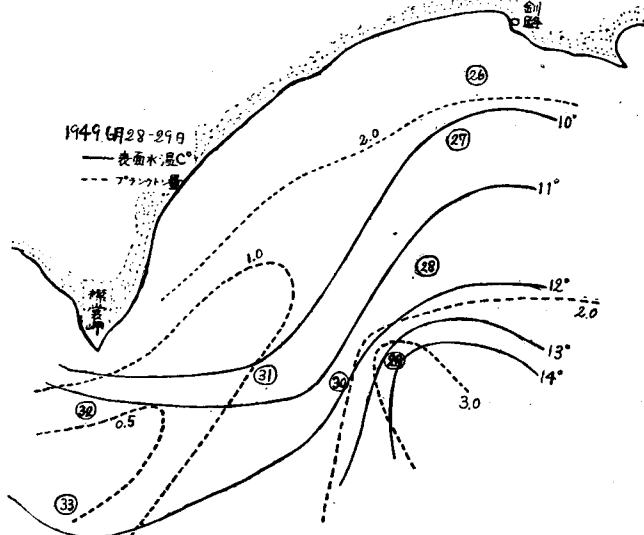
(2) 1949年5月日高沖海區

St. 1からSt.3までの13地點で19回の採集を行い、これが結果は第5表に示した。即ち本海區で

第 2 圖



第 3 圖



は植物性プランクトン16種、動物性プランクトン19種の計35種の出現を見た。全體としては植物性プランクトンは極めて貧弱で動物性プランクトンは種類も數量も優勢であつた。

主なものは植物性プランクトンでは*Chaetoceros criophilum* は沖合の部に、又沿岸部には*Ch. radicans*, *Ch. Lohrenzianum*, *Ch. debilis*等が出現した。動物性プランクトンも沖合と沿岸部で出現状態が異なるが、最も優勢な出現を見たものには*Calanus plumchrus* があり之に次いで *Calanus cristatus*, *Eucalanus giesbrecht*, *Oithona* sp. , *Paracalanus parvus*, *Pseudocalanus elongatus*, *Parathemisto* 等が認められた。

(3) 1949年6月釧路、襟裳岬沖海區

St. 19からSt. 33までの14地點で10米から表面までの14回の採集品に就ての檢鏡結果を示せば第5表の様である。即ち植物性プランクトンは17種、動物性プランクトンは29種で計46種となり、動物性プランクトンが優勢である。出現状況は地點によつて可成の相違が認められ、植物性プランクトンは釧路沖には*Rhizosolenia alata*, *Rh. styliformis*, *Ch. radicans*, *Stephanopyxis turis*等が出現したが、襟裳岬には *Ch. atlanticum*, *Ch. criophilum*, *Ch. sp.*等が多かつた。動物性プランクトンに就て見るも、各地點毎に幾分プランクトンの分布状態に相違が認められる。釧路沖合海區では*Ceratium fusus*, *C. longipes*, *C. arcticum*, *C. tripos*, *Doliolum nationalis*, *Parathemisto* sp. 等が目立ち襟裳岬沖合海區では *Ptychocylis obtusa*, *Calanus plumchrus*, *Oithona* sp. *Paracalanus parvus*, *Sagitta* sp., *Oecopleura* sp. 等があり全般的には *Parafavella ventricosa* *Calanus plumchrus*, *Oithona* sp., *Nauplius* 幼體等が多かつた。同一海區でも地點が異なるによつて出現するプランクトンの種類や數量にも差のあることは *Doliolum*, *Oithona*, *Calanus plumchrus*, *Parafavella ventricosa*, *Peridinium depressum*等の分布から明である。

第5表 北海道東沖合のプランクトン分布(5-6月)(其の一)

[illegible]

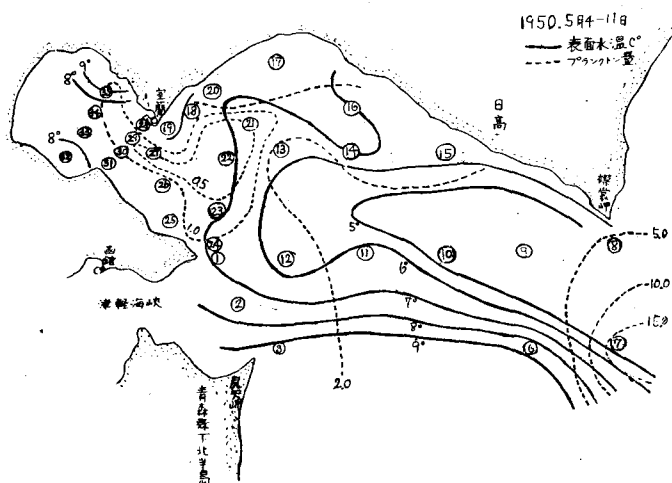
第5表 北海道東沖合のプランクトン分布(5-6月)(其の二)

[illegible]

St. 12からSt.18までに

(5) 1950年5月日高沖、噴火灣、口沖合海區

第 4 圖

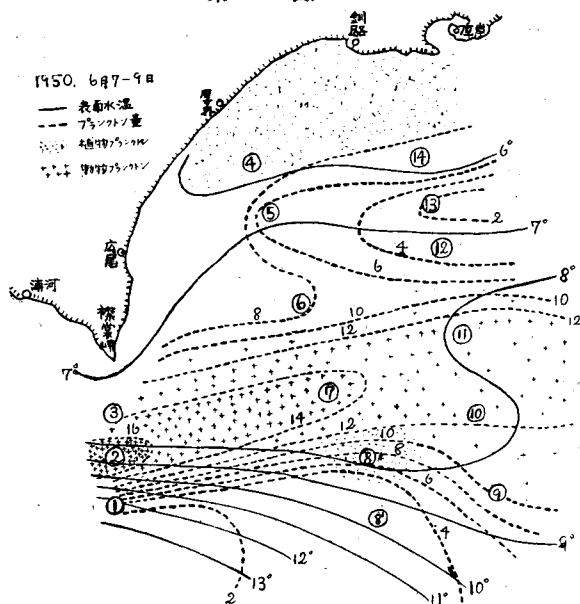


St. 1からSt. 17まで17地點で採集したプランクトンの出現状況は第5表に示した通りである。即ち植物性プランクトン33種、動物性プランクトン47種の計80種となつた。此の海區も廣大にしてその上海況も變化に富む。即ちSt. 1~3までは津輕海峽東口に當り、これより襟裳岬まで東にSt. 6, St. 7.が並ぶ。此の海區のプランクトンの種類の多いのは斯様な條件にもよるもので、

- 61 -

クトンは次の釧路沖海區に比べれば貧弱であるがそれに次いで出現量は多かつた。

第 5 圖



(7) 釧路～襟裳岬沖海區 1950年6月)

St. 1～14 まで14地點で31回の採集を行い、これが結果は第5表に示した。即ちSt. 1～3までは襟裳岬沖 St. 4～8までは厚内沖、St. 9～14までは釧路沖の三海區である。出現したプランクトンは植物性27種、動物性44種計71種であるが、地點によつて出現の状態は特徴がある。襟裳岬沖部では *Doliculum nationalis*, *Eucalanus giesbrecht* が比較的多く出現するが、St. 4からは新たに植物性プランクトンの *Ch. sociale*, *Denticula* sp. が多く出始め、この外 *Ch. atlanticum*, *Ch. radicans*, *Rh.*

alata, *Thrix longissima* 等が急に増して居り、動物性プランクトンでも *Noctiluca*, *Oithona*, *Paracalanus* が増し、之と逆に *Calanus plumchrus*, *Euphausia*, *Parathemisto* 等が減少して居り、明に水塊が異なることが認められる。厚内沖 (St. 4) St. 4～6附近までは珪藻類が比較的多く、特に沿岸部には多かつた。一方この海區は動物性プランクトンの出現量は少なかつた。

更にこれから東方沖合の St. 8では珪藻プランクトンの蕃殖區域があつて *Ch. atlanticum*, *Ch. sociale*, *Denticula* sp. が著しく、沿岸部の珪藻類と似た組成を示し、動物プランクトン相は貧弱であつた。これより更に東方の St. 8では珪藻プランクトンが再び減少して居る。釧路沖合でも沿岸部 (St. 14)は St. 4と似た珪藻繁殖區で、その組成も似て居る。これが沖合に従つて植物性プランクトンは減少し、動物性プランクトンの増加が著しかつた。

4. 考 察

今1949年並に1950年の5～6月の鮭鱒漁期に於ける各海區に出現するプランクトンの種数を示せば第6表の通りである。この表中 1949年の材料は1950年のものよりも検鏡を簡略にしたため、幾分種類数が少かつた。又漁場プランクトンの大要を把握することに重點を置いたため、種の判定

第6表 各海區プランクトン出現種数

年 月	海 區	植 物 性	動 物 性	計
1949年 6 月	噴 火 灣 内	10	12	22
"	日 高 沖	16	19	35
"	釧 路 沖	17	29	46
1950	噴 火 灣 内	10	34	44
"	" 沖 合	23	37	60
"	日 高 沖	33	47	80
"	釧 路 沖	27	44	71

の出来なかつたものは屬を代表させ、又稀に出現したものは省略したので實際の出現数は更に多数に上る筈である。兩年の種数合計 107 種あり、その中植物性プランクトンは41種(珪藻類40種)、動物性プランクトン66種

で、この中帶鞭類12種、テンチヌス類⁶種、橈脚類15種、その他であつた。即ちこの表からも推定出来る様に海區によつてプランクトンの出現種類が異なることが認められ、又前節に述べた様に各種類の出現の状況も海區により又地點によつて特徴があつた。これは要するに海況によりプランクトンの分布が左右されて居ることで、つまり水塊毎に、これに生活するプランクトンも異なることを示すものである。津幡(1951)も北海道南東海區に於ける10~11月の珪藻プランクトンの分布の状況から、之の海區を5つの海區に區分出来ると述べて居るが、今本調査の1950年6月の釧路沖だけでもSt.1~3及び7の襟裳岬沖海區St.4, 5, 14の十勝沿岸部、又St.7, 8, 9の沖合海區や、これらの混合海區(その他)の地點等に細分され、同様のことが各海區でも認められる。この廣範な海區を同時観測をして居らないために、今回鮭鱒漁場をプランクトンの分布の上から數海區に分つことは困難であるが、何れにしても海況とプランクトンの分布が密接な關係にあることは圖等によつても明に示されて居る。

次にプランクトン分布と鮭鱒漁場との關係であるが、練習船も収入の點を考慮する必要上海洋調査と流網試験を併行的に實施することが殆んど出来なかつた。先づおしよる丸で海洋調査をなし、その後作業船が二隻である海區で流網試験を行つたので、海況と漁況或はプランクトン出現状況と漁況の關係を闡明せしめるためには、經濟を犠牲にした基礎的研究の必要が痛感される。

今1950年6月の釧路沖の鮭鱒漁況を見るに1949年度に比べて一般に不動とされて居た。然しこの實狀をよく検討して見ると、釧路港を根據とする漁船は小型發動機船が多く、大型船は少い。不漁の原因はこの小型船が沿岸のみで操業して居つたために、羅網が少かつたため、大型船の沖合に遠く出漁したものは、何れも大漁をして歸港して居つたのである。釧路港の水揚高は不漁ではあるが、これは魚群が沖合のために捕獲能力のある大形漁船のみによる水揚高となつたことに起因するのである。今1950年6月と1949年6月の釧路沖海況並にプランクトン分布相を第5圖によつて考察するに兩年は著しい相違が判然として示されて居る。即ち1950年6月には釧路沿岸部の表面水温 5.3°C 近くで、沖合に従つて高くSt.10及9ではなほ 8.0°C 前後であつた。

又餌料プランクトンの豊富な海區も襟裳岬沖海區St.1~3及びSt.7等を中心とした海區で水温も 8°C 前後を示して居る。これは大體に於て釧路港に水揚される大型漁船の操業海區に比較的近かつた猶水温分布の上からもこの漁場の南方には明に顕著な潮目(不連續線)が認められたことも注意すべきものがある。次に1949年6月では沖合水温は比較的高温となり、表面で 10.0°C の等温線は1950年の釧路沿岸地點(St.14)にまで達し、温度差は 4.0°C 以上に達して居る。1950年のSt.10の附近では 8.0°C 前後のものが、1949年では 15.0°C 位にまで上昇して居る。このことは鮭鱒類の適温游泳層を釧路沿岸部に接岸せしめる結果となつたものと解され、この海況から考えて、沖合はむしろ惡條件の海區となつて居る。プランクトンの分布状態も沿岸部に著しい珪藻類の繁殖は見られず、又動物性の餌料プランクトンも相當の出現が見られた。プランクトンの分布の中でも、珪藻類の大繁殖區域はHardyの植物プランクトンの動物排除説にも説かれて居る様に、動物性プランクトンを始め、魚類や鯨類に至るまでこの海區を避ける傾向のあることが各漁場で注目されて居り、この點から鮭鱒漁業でも植物性プランクトンが多く、透明度の少い(1950年St.14では透明度5.0)海區は鮭鱒漁場には適さないことがうなづけるのである。次に餌料プランクトンの分布と、鮭鱒類の洄游であるが、田村、河合が別段に述べた様に、此の季節の鮭鱒の洄游は索餌洄游の魚群と認められるので、當然餌料プランクトンを索め、その上適温帶の制限を受け乍ら洄游して居るものと推定される。直接攝取して居る餌料はプランクトンネットに採集される大型の動物性プランクトンの外に、ネットに採集されないものも(ハダカイワシ等)胃中から發見された

が、大體に大型プランクトンの多い海區は好漁場となつたものと1950年6月の漁場の條件から考へて推定出来る。北海道水試(1932)が昭和5年度のトキシラズ洄游調査試験では根室海峡で暖流區域と認められるところにトキシラズの洄游の多いことがあつたが、二つに出現したプランクトンは *Parathemist* 及び *Euphausia* で良好な天然餌料のため之を飽食して居つたと云う。即ち餌料プランクトンも鮭鱒類の分布と密接な關係のある證據である。又横山、川上兩氏(1932)も北千島沖合の鮭鱒漁場で、21回のプランクトン採集中 1,500 尾以上漁獲のあつた地點と、これ以下の地點ではプランクトン量は平均して前者は 1.22cc 後者は 0.6cc であつて、プランクトン量の多いところは概して漁獲が多かつたと報告して居る。

以上で1949、1950兩年度に實施した鮭鱒漁場に於けるプランクトンの分布と漁場とが如何なる關係にあるかに就て概要を述べたが、將來は海況を一層精査する必要のあることを指摘し、この種の研究が必ずや漁場の撰定に役立つものなることを信ずるものである。

5. 摘 要

- (1) 1949、1950年5~6月の候に於ける北海道東海區の鮭鱒流網漁場のプランクトン分布状態を調査した。
- (2) プランクトン分布の状況と密接の關係にあつて、水塊の分布とこれに生活するプランクトンの種類とが一致することを明にした。
- (3) 1949年と1950年の釧路沖合の鮭鱒の漁況はその海況プランクトン分布とも密接な關係があつたことが指摘された。
- (4) 海況と漁況の關係に就て將來この種の基礎的研究の完成は本漁業を合理的經營に導くことに役立つものである。

6. 文 献

相川 廣秋,	1934,	水試報,	5 ; 237
相川 廣秋,	1935,	水試報,	6 ; 131
〃	1936,	〃	7 ; 153
〃	〃	日水會,	5 ; 33
菅野 利助,	1939,	北千島海區に於ける鮭鱒流網漁場調査豫報、北千島水産會	
北海道水試,	1932,	ときしらず洄游試験(昭5年度)、北水旬、157號	
田村 正,	1951,	北水誌研報,	8號; 13 ~ 38
田村 正,	1950,	函海氣象, 海洋時報,	2號
津幡 文隆,	1950,	日海會誌,	6 ; 2 號
横山 將來,	川上 四郎(1932), 北水試復命書, 昭和7年		

(水産科學研究所業績 第151號)